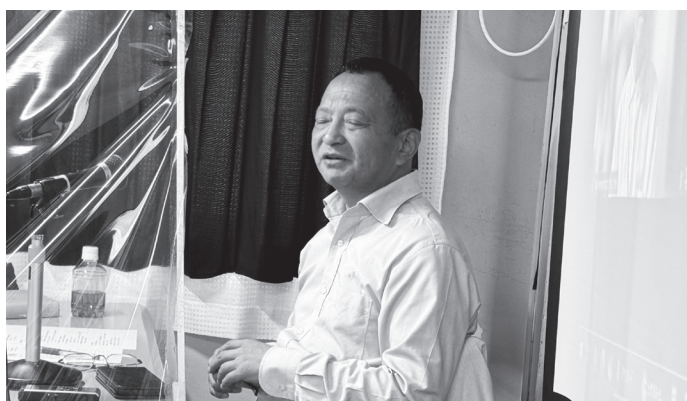


発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail: naka-ch@hb.tp1.jp HP: http://church.jp/naka/
発行者 なか伝道所／編集委員会 (題字 松橋 順)

宣教方針 ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。
集会 主日礼拝 日曜日(第1・第3はりモートあり、
第4 自主礼拝、教会暦による変更あり)
午前10時30分より

寿生活館の歴史的役割と意義



今回は、寿支援者交流会事務局長の高沢幸男さんより、寿生活館の歴史的役割と意義について、お話を伺うことができました。寿生活館は寿のシンボルのような存在ですが、大変な思いをして出来たこと、寿生活館が時代とともに変化している日本を先取りしていることをお話しいたしました。

寿生活館の歴史的役割と

意義について

高沢 幸男

(寿支援者交流会 事務局長)

寿生活館という建物は横浜市が所有する公共施設である。そのように言ってしまうと、それまでであるが、寿生活館は様々な自主活動拠点となっており、その果たしてきた意味は大きい。生活館を建物とみるか、居場所としてみるか、拠点としてみるかによって意味合いが変わってくる。しかも、一部には住民運動に行政職員も関わってきて、事務局的な役割を果たした事実もある。生活館が住民運動に果たしてきた役割について検討していきたい。

生活館の条例上の位置づけ

寿生活館は横浜市が所有の建物であり、寿生活館条例によって設置された公共施設である。

横浜市生活館条例では、第一条(目的及び設置)には「住居のない者及び簡易宿泊所宿泊者等の更生と福祉を図るため、横浜市寿生活館を横浜市中区に設置する。」と規定されている。また、第二条(事業)には、「生活館は、次の事業を行う。(一) 対象者の生活各般の相談及び指導、

(二) 対象者の生活の援護、(三) 対象者の健康相談、(四) 対象者の保護する児童の育成指導、(五) その他前各号に準ずる事業」とかなり幅広い対応が求められている。

生活館の設置は一九六五年であり、現在の四階建てになったのは一九七二年である。「住居のない者」と野宿生活者を利用対象者の中心に据えている全国でも珍しい施設である。四階に設置されているシャワーや洗濯機・乾燥機はいずれも無料(洗剤などは持つて来てもらう必要がある)であり、身支度を整えて自尊心を持って、野宿しながらでも横浜で生き抜いてほしいということが体现されている。

また、二〇一二年三月までは通称「パン券・ドヤ券」と呼ばれていた食券・宿泊券の法外援助もあり、横浜から追い出すのではなく、横浜の地で生きてほしいというメッセージを込めた施策が様々行われていた。また、そのような状況を踏まえて、適切な管理を行うことを条件に野宿生活者の荷物を生活館四階娛樂室に置いておくことができるような運用が現在も行われている。私は生活館の責任者でもありますが、実際に運用する職員にも条例に明記されているので、野宿生活者に寄り添

うような対応、換言すれば、一番小さくされた者を最優先するような運営を行うことを意識して対応するように伝えていきます。

行政職員との協働も行われていた

施設というのは、その運営をする職員がいて、はじめてその趣旨に沿った運営が行われると思っていいます。

一九六三年に飛鳥田革新市政が誕生し、その市長の後ろ盾もあり、生活困窮者に寄り添うような対応ができるような職員が採用され、生活館に配置されてきたことも住民運動を支えるうえで大きかったと思います。草創期の寿地区の住民運動を担い、事務局を務めてきた人たちとしては以下のような人物がいます。

・加藤彰彦さん

「野本三吉」の名前でも多くの著書を持つ人物で、寿に住み込んで自分の給料もみんなの生活費ということで、みんなと食事をし、月末になるとお金がなくなり、中華街で残物などをもらってみんなで食べていたと語る。共同体を体现する人物です。

その後は、児童相談所を経て、横浜市立大学教授、沖縄大学で学長も

務めました。

・田中俊夫さん

田中さんは「ことぶき共同診療所」の創設者です。もともとは生活館職員で、七五年の生活館閉鎖時には門の前に机を出して、権限もないのに生活保護の申請を受理したりしていました。いろいろあり、解雇され、その後、医学部に通って、医者になり、ことぶき共同診療所を創設しました。

・三浦保之さん

他の二人とは違い、定年まで横浜市のケースワーカーを務めました。その後、NPO法人「市民の会寿アルク」に関わり、事務局長を経て、現在は理事長を務めている。

生活館はオイルショック後一時閉鎖

寿生活館はオイルショックのあった七四年末から野宿生活者の寝泊まり・生活の場所として占拠して越冬を続けた。生活館自体は一九七五年二月には緊急閉鎖が決められる中、前述のように自主的な相談業務が行われた。実質、この占拠闘争は三年に及んだという。連日の炊き出しも行われ、生活館には「俺たちの紅白歌合戦」という表示も残っており、

様々なイベントも行われてきたよう

だ。

そんな中で、再館に向けての話し合いが行われ、行政・地元（寿住民懇談会）・横浜市の労働組合の三者協議が行われ、一九八一年三月にほぼ現在の形での生活館運営が行われるようになった。

この頃には子どもの活動も盛んで、学童保育や共同保育が設立されたりしていた。最近では寄り添い型学習生活支援の「ことぶき青少年広場」も設立されている。

その後、バブル崩壊により、

寿周辺では野宿生活者が急増

一九九二年のバブル経済崩壊を受けて、寿地区周辺では野宿生活者が増加した。日本全体に影響が及ぶようになるのは、バブル崩壊後の景気対策が功を奏さず、その後の橋本緊縮財政で終身雇用制が崩壊させられたあたり、九〇年代後半のことである。

生活保護法第二条（無差別平等）

には、「すべて国民は、この法律の定める要件を満たす限り、この法律による保護を、無差別平等に受けることができる。」となっており、どこにも野宿生活者は例外とは書いてはない。

しかし、実際の運用として野宿をしていると、自立の助長ができないということで、生活保護の申請を受理しないという水際作戦が行われた。二〇〇二年八月にホームレス特措法が施行され、大都市圏では改善されたが、地方都市なども含めて野宿を理由とした生活保護の水際作戦がなくなったのはリーマンショック以降である。

しかし、寿では「生存権を勝ち取る会」が結成され、一九九三年に行政交渉の結果、住所のない者の生活保護申請については簡易宿泊所代一泊分を貸し付けて居所設定をして、生活保護申請を受けるようにするとした。その時にも、当時の生活館職員（行政職員）が有給休暇を取って交渉に参加し、「私は憲法に従って仕事をしますが、違法な業務命令には従わない」と発言したことは今も語り継がれている。

その後も、食券・宿泊券の制度変更説明会に参加して、むしろ宿泊券の値段を生活保護水準まで上げて使える簡易宿泊所を増やすべきだと主張した生活館職員（行政職員）もいた。

このように、寿の運動は法と正義に従って対応しようとする行政職員に支えられての部分も大いにあった

と思われる。

生活館職員に求められる仕事の範囲
生活館の仕事は基本的には「うんこの片付けから学会の講演まで」と言っている。

生活館の職員として、現場の最前線で生活に困った人の対応をしなくてはならない。しかも、生活相談も、生活の援護もしなくてはならない。相談を受けることで、生活困窮者の現状や仕事を得る状況（「タイミー」などの日払い労働の増加）なども把握することができる。

現場で得た知見を、ホームレス自立支援実施計画策定会議や人権懇話会などの場で発言し、行政施策に生かさせていく役割も果たしている。現在では住まいの相談の強化も位置付けられて、居住支援協議会などでも見識を活用してもらうようになっている。場合によっては、学会などでも講演し、現場を知らない大学の先生たちの質問にも答えなければならぬ。

しかも、地元支援団体内部の調整や行政との交渉窓口など求められることは多様に及ぶ。

掃除や寄付の受け入れなど職員がやりきれない部分は利用者が協力して行うようにしている。そのため、

生活館大掃除を年二回やっているが、十五名程度の利用者が手伝いに来てくれている。「自主管理」の精神は今も続いている。

今後に向けて

寿地区の今後を理解するキーワードとして、「流動する下層労働者」と「暫定居住（自分名義の家に住んでいないこと）」を挙げたが、ここについては文字数の関係で割愛する。

寿は「福祉ニーズの高い町」、「高齢化率の高い町」と呼ばれるが、寿には寿に繋がる子どもはたくさんいて、二〇二三年に学童保育がなくなつて、不登校の子などの居場所の一部がなくなつてしまった。なか伝の教会員でもある元学童保育の指導員などとも協力して月二回の居場所を行っているので、みなさんにもぜひ協力してほしいと思う。

寿地区は貧困化、少子化、高齢化、単身化、孤立化が進んでいるが、これ自身は社会的な課題であり、三〇年後の市民社会の形を先取りしているともいえる。この寿から経済的には貧困でも、豊かに生きるといいう形を発信していくことが今後重要になってくると思っている。



高齢化社会



高沢さんのお話しの様子

なか伝道所の現在の活動

小笠原敦輔・公子

なか伝道所では、この「なかだより」をご覧くださいとある皆様のご支援に感謝しています。

皆様になか伝道所の活動をご紹介します。

なか伝道所は無牧になって五年となり、牧師招聘を願っていますが、叶えられず、私たち信徒は、代務者の横浜磯子教会中村先生と共に困難に立ち向かっているところです。

月の第一主日は私たち信徒が中心になって、学習会の運営を含めて礼拝を守っています。月初めは誕生会や先月の運営委員会の報告も行っています。

原則、月の第二・五主日は自宅礼拝でお休みになります。

月の第三主日は外部の先生をお招きして、使信をお願いしています。なか伝道所名物は使信の後に、かなり長い時間質疑応答があることです。運営委員会はその後持たれます。

今までの礼拝は、オンラインでも中継していますが、月の第四主日は武井さんが中心になってオンラインなしで自主礼拝をしており、信徒一人一人の証を聞くことができます。

使信^{ししん}

「大地は神さまのもの」

ローマの信徒への手紙 八章二〇〜二五節

溝ノ口教会牧師 飯田瑞穂

20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。

21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかるからです。

22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。

23 被造物だけでなく、「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。

24 わたしたちは、このように希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見えているものをだれがなお望むでしょうか。

25 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

戦後八〇年。ガザやウクライナの惨状に言葉ありません。ロシア軍がウクライナ侵攻直後にチェルノブイリ原子力発電所を占拠し、原発施設内で警備隊と戦闘を繰り広げたことに震撼させられました。常軌を逸する戦争。原発は自国に向けられた核兵器になりえます。私は一九八六年に起きたチェルノブイリ原発事故のことを咄嗟に思い出しました。

戦時下のチェルノブイリ被災者

私が、チェルノブイリに関わるようになったのは、オホーツク海沿岸にある興部伝道所で子育てしていた時期でした。旧ソ連でチェルノブイリ原子力発電所の事故が起きてから5年後、町立病院の医師が、新聞の記事を持って牧師館を訪ねてきたのです。記事は「ドイツでは汚染地域から子どもを一月預かった後、子

どもの免疫能力が上がった。北海道でも保養ができないか」という市民からの呼びかけでした。被災地では、子ども達に鼻血、頭痛や腹痛、関節炎の痛みなど、体力や視力の低下がおき、小児甲状腺ガンが多発していました。「私達の当たり前の空気が水、食事を提供しただけで、子ども達の健康を回復させると知り驚いている」と言われた医師の誘いにより、夏休みの5年間、我が家でもベラルーシの子どもたちを預かりました。その後、東京ではNCCチェルノブイリ災害問題プロジェクトの協力幹事として汚染地域と交流し被災地支援を続けました。ローマの信徒への手紙八章「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」の御言葉は、私に向き合ってきた聖句です。

被造物のうめき

水俣の乙女塚に滞在した時も、この聖句を読みました。水俣病胎児性犠牲者を鎮魂する乙女塚の丘を上がると、瀕死の子を抱く「海の母子像」があります。この母子像の足元に、ミナマタ、ベトナム、ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリなどの文字

が雨に打たれた石の上に刻まれているのを見た時、地球のうめき、子ども達のうめき、全ての命のうめきが聞こえてくるようでした。水俣病の胎児性患者の問題は、母親の胎盤が胎児を毒物から守るバリアの働きをしていると信じられてきた法則を崩す出来事でした。原発事故においても、子ども達の甲状腺は、人工の放射性ヨウ素を自然界にあるヨードと間違えて取り込んだのです。地球は、水や大気、自然の存在する物質が循環し、被造物の生命はこの循環によって支えられてきましたが、人間は循環とは無縁の有害物質や人工放射能物質を作り、地球環境に拡散する事態を招きました。被造物が虚無に服しているのは、神を神とせず、隣人を貪り、海洋を汚染してきた大人の罪の結果です。大地や水の問題ではなく、人間は自分が何者なのかを見失っていると聖書から問われています。反戦、反核、反公害の原点の地とすべく乙女塚は、私にとって忘れてはならない場所になりました。

宗教的倫理的観点から

二〇二〇年三月九日、キリスト者、仏教、神道など二百十一名の宗教者・

信仰者が、日本原燃株式会社に対し、青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場の運転停止を求め、「宗教者核然サイクル事業の差し止めを求める裁判」を東京地方裁判所に提訴しました。私も原告の一人として参加しています。この裁判は、「命をつなぐ権利」という言葉を用いて闘われることになりました。提訴するきっかけとなったのは、ドイツが二〇二二年までに脱原発を決定したことに大きな役割を果たした「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」の存在です。「原発による放射性廃棄物は今の世代だけではなく、何世代にもわたって残る」との報告を出した委員会の構成員に、カトリックの枢機卿とプロテスタントの牧師が一人ずつ選ばれていたことに、核問題に携わる日本の宗教者・信仰者は大いに励まされました。原発を常に核兵器と結びつけて議論し次世代のために再生可能なエネルギーのインフラ作りに舵を切ったドイツからは、核拡散に対し「否」というメッセージも感じられます。

さて、この裁判の母体は一九九三年に結成された「原子力行政を問い直す宗教者の会」です。会の共同代

表だった故岩田雅一牧師からは、「遠くへの支援は比較的簡単だが、国策に抗う足元での運動は厳しい」と教えられました。岩田牧師は、一九八〇年代に六ヶ所村の問題に直面し、そこで留まり続けた牧師です。また、十五基の原発が立地する若狭の小浜市明通寺の住職中寫哲演さんからは、被ばく労働者の問題について教えられました。住職によると、深夜、一人の原発労働者が寺を訪ねて来たそうです。住職は夜を徹して原発の危険性を一部始終説き明かすと、その人は最後に一言、分かりましたと言って早朝立ち去ったということでした。原発労働者自身がかま口封じに遭ってきた原発マネーの構造を窺い知りました。過疎地の原発で作られた電気は、首都圏に送られます。一方、全国の原発から出る使用済み核燃料は、青森の六ヶ所村の核燃料再処理工場に集められ再処理され、最後は過疎地のどこかに埋設されるという計画ですが、その最終処分地すら決まっていません。再処理する工程で原爆の原料となるプルトニウムが生産されるため軍事転用の可能性もありません。ここが本稼働すれば、原発から出る一年分の放

射能を一日で放出するため、万が一、地震などによる事故が起これば、より過酷な事故になり得るのです。危険なゴミは過疎地へ、見えない場所へ、弱い立場の者へと押し付ける「入れ子構造」、「差別構造」が日本の原子力行政の実体。誰かの被ばくの上に電力を享受することは平和の姿からほど遠いものです。地球の悠久な時間から見れば、わずか一時の電気を得るために巨額な資金を投じて利権を貪る原発。それに伴う核廃棄物を半永久的に地球に遺すことについて、未来の子どもたちは私たちをゆるしてくるのでしょうか。

樹木がもはや枯れそうです

裁判では、小高区同慶寺の田中徳雲住職が陳述しました。「事故後、科学者や為政者はそこに住んで大丈夫というが、自分達は小さな子どもたちも含めてそこで生活しているのです。二四時間、三六五日そこにいます。時に田畑を耕し、落ち葉を掃き、焚火をしたり、沢から水を引いたりして。（中略）事故が起きても誰も責任を取らないし、取れないのです。お金に換算して和解を模索することになりましたが、それは

更なる分断や心の荒廃の原因になり、困難を極めます。私は避難先で孤立している方や、やるせなくて酒におぼれアルコール依存で生活が困窮している方をたくさん見てきました。小さな声さえ上げられない方もいるのです。しかも失われた自然は元にはもどらない。（中略）私たちは地球の一部、自然環境の一部です。リンドゴの樹に例えるなら、一人ひとりが果実だとすると、地球は樹木です。その樹木がもはや枯れそうである」との訴えでした。本当に、もはや樹木が枯れそうです。しかし日本政府は、子どもの甲状腺ガンと原発事故との因果関係も認めず、保養についてもチェルノブイリの教訓に学ぼうとしませんでした。ウクライナ問題を契機に原発の再稼働や原発の六〇年超運転を認め、現首相は核保有にまで言及しました。この国にとって福島核事故は何だったのでしょうか。全国の原発サイトにある使用済み核燃料は既にほぼ満杯です。六ヶ所再処理工場が廃止になりこれらの使用済み核燃料が運び込めなくなれば、全国の原発は動かせなくなり、一人でも多くの方と声を上げた

チエルノブイリ被災地で、最終的に私が教えられたのは、「全てを失ったが、最後に残るのは信頼関係だけ」と語ったタチアナさんの言葉でした。地域の土壌汚染の管理をし、正しい数値の公表を求めて行政に抗い仕事をしていたタチアナさんは、自分達が忘れられていないことが心の支えと言われました。たとえ小さな力であっても問題と格闘する人たちと繋がり、足元から平和の輪を広げるしかないのだと悟られました。「大地は神さまのもの」です。神の創造の業である、命のサイクルに立ち返りたいと思います。



風景

小さな傷跡

二〇二五年八月

なか伝道所礼拝

岩岡千恵子

私は東京両国の下町育ちです。小学校二年一組一九五九年（昭和三四）年の思い出です。

クラスにS君という男の子がいました。S君のお父さんは、両国駅のガード沿いで靴磨きをしているのです。

担任の先生が、その姿を通勤途中で毎日見ていたのでしょうか？先生の提案で、クラスでできる人でわずかなお金を出し合って助け合いましよう、と、代表二人を決めて、お金を集め布袋に入れて、代表がお父さんに届けたのです。当時のお金は一円、五円位、でも集まれば大金になります。電車にも乗れるし、コッペパンも買えたのでは…。

先生はとてもユニークな人で、児童をのびのびと、読み書きそろばんさえ出来れば困らないといった寺子屋風のおじいちゃん先生でした。

クラスには青っぱなをたらしたわんぱく坊主がいて、掃除当番時、ほうきを振り回して鞍馬天狗や赤胴鈴

之助の真似をしたり、ふざけたりして、面白かったです。とても楽しいゆかいなクラスでした。

また、となりのクラスには何日もお風呂に入っていない男の子がいて、担任の先生が見るに見かねて、「〇〇君、これでお風呂屋さんに行っておいで！」と銭湯代を渡していた姿は、今でも脳裏に焼き付いています。

これも“戦争の小さな傷あと”なのかなぁー”と、ふと思うのです。

戦後八〇年経ち、私は戦争を経験していませんが、復興中で、あの時を思い出すと、当たり前のことができなかった大変な時代でした。物もなかったし、苦しかったけど目標に向かって皆一生懸命生きていた！心がリッチでした。

世界が平和であってほしいです。



支援献金（六月〜九月分）

加藤敬、大久保洋子、横山潤、渡辺輝夫、新宮静子、宮崎祥司、宮田ゆう子、加藤敬、八重樫恵理子（以上敬称略）

総額七三、〇〇〇円

感謝してご報告いたします。

クリスマス献金のお願い

暑い夏、寒い冬、なか伝のある寿町は、暑さ・寒さが身に沁みます。今年もクリスマス献金をお願いします。昨年は、二二三、〇〇〇円のご支援をいただきました。皆様のご支援、ご協力を感じるとともに、献金をお願い申し上げます。



編集後記

二〇八号をお届けします。今回は寿支援者交流会事務局長の高沢幸男さんより、寿生活館の歴史的役割と意義について貴重なお話を伺うことができました。また、飯田瑞穂牧師が八月の平和聖日にお越しくださり、「大地は神さまのもの」と題して、大切な使信をしてくださいました。（敦）